

芦屋市平和記録集「たゆまぬ平和への歩み」～芦屋市民の記録～より抜粋

昭和20年5月11日、私は、阪神芦屋駅の北側にあった芦屋郵便局の2階で仕事をしていました。

正午頃、空襲警報が鳴り、大粒の雨が一度に降るようなザーという音がしたので、窓から西の空を見ると、B29の編隊がこちらに向かって来ており、急いで階下へ下り、通用口のセメントにペタッとうつ伏せになり両手の親指で耳を押さえ、残りの指で目を押さえ、口を固く結んでじっとしていました。

しばらくして防空壕に逃げていた同僚たちが帰ってきて、「青木の川西航空がやられたらしい。」と聞き、仕事が終わってから電車の走っていない線路に入り、枕木の上をタッタと歩いて、深江の駅を南へ出ると、吹き飛ばされた防空壕があり、その横に土埃をかぶった青黒い顔の死体が並べて置かれ、髪の毛長いモンペ姿の女性、その横に2、3歳くらいの子ども、その隣に男性の死体があり、思わず手を合わせました。

旧国道(現在の国道43号)に出ると、牛が目をむいて座っており、腸が飛び出していました。数メートル離れたところには、荷馬車が横に転がり、馬が足をそろえて倒れていました。爆風にやられたのでしょう。もう青木の川西航空に行くのをやめて帰りました。



終戦の放送に聞き入る児童



今も残る機銃掃射の痕跡(西芦屋町)

その日は、国鉄の芦屋駅(現在のJR芦屋駅)と岩園小学校に爆弾が落とされました。岩園小学校には、兵隊さんが大勢いましたから狙われたのだと思います。

8月15日正午に終戦の放送を聞いて、へなへたと座り込んで泣きました。張り詰めていた気持ちがぐずれました。

私の家は、岩園町の少し高い所にあり、夜になって市内にポツリポツリと灯りが見えた時は、「本当に戦争は終わったんだ。」と思い、電灯の黒い布を取り除きました。

秋になり、長い間病気で寝込んでいた母が、「何かおいしいものを食べたいなあ。」と言いますので、三ノ宮の国鉄のガード下にある闇市へ行き、大勢の人に押されながら、やっと「いかにぎり寿司」を見つけ、1個10円のを10個買い、母の喜ぶ顔を思い浮かべながら、家に帰りました。布団の上に起き直った母は、拝むようにして、ひと口ひと口ゆっくり食べて、2個を食べ終えて横になり、「ご馳走さん。後はあんたたちで食べなさい。子どもより先に食べて悪いなあ。」と言いました。

明けて昭和21年1月に、母は亡くなりました。私と弟の二人で葬儀のことなど途方に迷いまし



空襲の火災で溶けたガラス瓶(津知町出土)

たが、弟が友達と二人で板を拾い集め、棺おけをつくり、母の身体を納め、借りてきた大八車に棺おけを荒縄でくくりつけ、薪を積んで三条の焼場まで運び、火葬を済ませホッとしました。

あの頃の私は「いつ死んでも仕方がない。」という覚悟のようなものはもっていましたが、とにかく「今夜は空襲もなくぐっすり眠れるか、明日は何を食べようか」で頭がいっぱいでその時その時を切り抜ける毎日でした。

戦後、折にふれて思うことは、「戦争とは、人と人の殺し合いと破壊を集団で行うこと。」よーいどんで戦争が始まることはない。必ず火種がある。それを見極めるため、報道の自由と公平な学校教育が大切です。

戦争に関する記録集を発行しています

- 芦屋市平和記録集「たゆまぬ平和への歩み」
- 芦屋市戦争体験記録集「未来へつなごう戦争の記憶」
- 芦屋市平和記録集「語り継ごう平和への想い」

※市役所分庁舎1階 人権・男女共生課にて配布しています。

ぜひご覧ください。(市ホームページからダウンロード可)



問い合わせ 人権・男女共生課 ☎38-2055